



「旧ユーゴスラビア、セルビアの首都ベオグラードにある
 広告代理店ニューモーメントアイデア社のギャラリーで、
 2007 年から 1 年に一度、日本人アーティストの個展が 4
 回開催されました。ギャラリーキュレーター、クセニアさ
 んの企画によるものです。/今回その 4 人が集まり、その
 後のセルビアとの関わりをそれぞれ独自の表現方法で制
 作展示することになりました」(フライヤ)。

その 4 人とは長見有方、鈴木純子、古賀亜希子、田島木綿
 である。ステップスオーナー吉岡まさみのブログによると、
 展覧会のタイトルであるヒランダルスカとは地名であり、
 14 番地にギャラリーがある。今回の企画は長見であるとい
 う。銀座がベオグラードになった。

長見は《ベオグラード 2007》(写真/20×25cm/2007 年)を
 30 余点出品した(右下)。いずれも何気ない風景なのだが、
 この町を知り尽くしていなければ撮れない視点だ。つまり、
 観光客には撮影できない。10 年前の作品であると信じら
 れないほどに、新鮮さを保っているのも魅力の一つだ。

鈴木はリネン(ほぐし緋/シルクスクリーン・織り)の新
 作と、ベオグラードで撮影した写真を元にした作品(2009
 年/インドシルク)を出品した(左上)。風景と人物。不思
 議な魅惑を放つ。セルビア人と、セルビアの風景が。特別
 な場所や人物などよりも、人間が生きていることが大切だ。
 古賀は《ヨルダンカ》(写真/19×29cm/2010)一点と「ソテ
 イロフさんとの思い出」というベオグラードで出会った画
 家との約束の文章を展示した(左下)。ここはソティロフ
 さんの部屋だろうか。言葉、イメージ、記憶、未来が交差
 するのは、古賀の作品の特徴である。

田島は《25. 11. 2011》(紙・HDF ボード/26×33cm/2017 年)
 を 8 点、展示した(右下)。各作品には手紙や切手が貼り
 込まれている。コラージュの様相である。バックパッカー
 である田島が、自ら発信したものなのか受け取ったものが
 が明確でないのが想像力を欠き立てて、いい。
 ベオグラードの風が吹いた展覧会であった。私もベオグラ
 ードに行きたくなった。誰もがそうになってしまう。

